



第8回 2014年8月5日（火）

武井一さん

大韓帝国皇帝が派遣した留学生たちの東京体験
～19世紀末から20世紀初期の頃の旅人～

皇室特派留学生

- 1904年11月来日 50名(仁川から船)
- 大韓帝国皇帝による派遣
- 〈計画〉
- 東京府立第一中学校(基礎教育)
- 専門の学校へ(実学系)



なぜ、留学に来たのか。

- ・近代のアジアの位置
- ・近代の日本と韓国

近代のアジア

- 欧米の東漸時代
＝帝国主義の時代(特に1870年代以降)
- 万国公法(国際法)の世界
 - ・文明国(キリスト教国)
 - ・半開国(トルコ、インド、中国、日本、韓国(朝鮮))
 - ・未開国(ただちに植民地にして良い)

半開国: 場合によっては植民地化される国。

中国、日本、韓国

- 中国: 一番大きな市場＝欧米の関心が強い
 - ・アヘン戦争、アロー戦争
- 日本: 二番目に大きな市場
 - ・中国の経験
 - ・欧米の状況(東方問題、南北戦争)
- 韓国: 三番目に大きな市場

⇒三国とも生き残りの努力。

日本

- 国の目標
＝植民地化を防ぐ⇒急速な近代化。
そのために天皇中心
- 大前提: 列強に「文明国」として認められること。
(特にイギリスに対して)
＝欧米の制度を導入、遵守。特に国際法
〈条約改正のため〉
- 日清戦争で英国に認められる(日英同盟: 列強の一員)

韓国



- 地理的位置
- 中国との冊封体制
冊封: 中国皇帝と王の関係
内政に干渉しない
(保護国とは異なる)
- 日本の進出
→冊封体制の変化→日清戦争→「自主の邦」→日露戦争
- 独立を守る努力
高宗、大院君、明成皇后(閔妃)
独立協会ほか
(大韓帝国への国号変更も独立を守る努力の一つ)

1904年から1905年

1876	日朝修好条規
1882	朝米修好通商条約
	壬午軍乱
1884	甲申政変
1894	日清戦争
1895	下関条約・三国干涉
1896	ドイツ(膠州湾:租借)
	ロシア(大連、旅順租借)
	イギリス(威海衛租借)
1897	国号変更:大韓帝国
1904	日露戦争:日韓議定書(中立にもかかわらず)
	甲辰条約(第一次日韓協約)
1905	乙巳条約(第二次日韓協約)

- 日露戦争
圧倒的な日本の勢力。
- 日韓議定書
- 甲辰条約
⇒留学生派遣決定
(前回の官費留学は1894年)

留学生

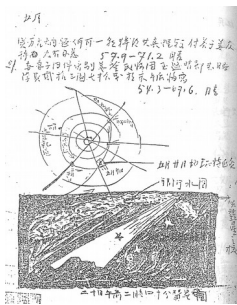


東京府立第一中学校



集合写真(16歳から25歳の青年?)

東遊略抄(趙鏞殷の日記)ほか



趙鏞殷(趙素昂:1887~1958)の日本滞在日記。1904年~1912年5月まで。外にも滞在中に多くの文章を残している。帰国後上海に亡命。大韓民国臨時政府外交部長などを歴任。

趙鏞殷の経験

- 1904年 皇室特派留学生(府立一中)
- 1905年 同盟休校(明治大学)⇒一中
(乙巳条約(保護国、公使館撤退))
- 1907年 補習科
正則英語学校
(ハーグ事件、丁未条約)
- 1908年 明治大学予備校
明治大学予科法科
- 1909年 明治大学法科
- 1910年 (韓国併合)
- 毎日の生活
- 近代日本に対する視点
- 亡国の悲しみ、苦しみ(特にその感覚が強かった)。
- 大韓興学会などの留学生団体で、精力的に活動・啓蒙運動
- 併合までのすべての動きを東京で経験している。
⇒外の留学生で全部を経験した人は いない。
- 日記が残ること自体珍しい
「地境のために日記を書かない」
「天下にぞって顧みない」

留学の目的

- 韓国の国作りに役立て、亡国を防ぐこと。
⇒そのために日本の近代を学ぶ。
- 留学生(官費、私費含め)の多くが、法科進学を希望する。
cf. 科挙(1894年廃止)



日常生活

- 学校生活
習慣の違い
旧正月に授業があった
犬
- 望郷
先祖の命日に家にいない。
七夕、流頭日、秋夕、重陽の節句
故郷の望芳里でも同じ月を見ているのだろうか。
- 遊び、娯楽
花札、靖国例大祭、小金井などへの花見(漢詩を多く残す)

一中が見せようとしたもの

- 中等教育、実学教育制度が固まった時期。勝浦頼雄校長
実学の充実が日本を強い国にしたという考え。
- 日本体育館、淀橋浄水場、水産試験場、靖国神社、観兵式、中央气象台、
犬吠崎灯台、醤油工場、ヨードチンキ工場、農科大学演習林、捕鯨所、
仙台紡績工場、水力発電所、石灰製造所、横須賀軍港、富士製紙第二工場、
二重織組所、生糸工場、型染め工場、楽器製造所、熱田築港事務所、
熱田車両製造会社、製氷工場など。
- ⇒見せたい所と見たい所が噛み合っていない。

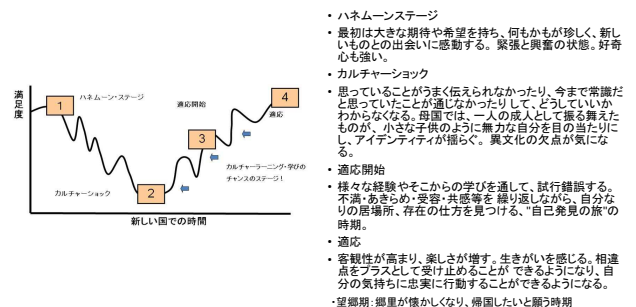
趙素昂の見た近代日本

- 町があれば必ず学校がある。山に禿山なく、野に荒地はない。貧しい村にも電信が通り、山道にも車や馬が行き来する。どこに行っても製造工場がある。日本が列強と比肩できるのも当然、こういうことがあるからであろう
(孤児、未亡人が目に付いた。日露戦争の余毒であろうか)。

1905年～6年(同盟休校)

- 1905年11月: **乙巳条約**
韓国保護国化(烈しい怒り)
韓国臣民で血の痛まない者はいないはずだ。
…維新以来、このような「大魂」が亡ぶことはまっぴらなかつた…
cf. 国際法上の保護国: 外交権を奪われた国(チュニジア以来)
公使館(撤退)⇒留学生監督部(学部)
- 1905年12月: 報知新聞
同盟休学⇒退学⇒復学(3月): 政府間の問題に。
12月まで: 外務省(日本政府)⇔公使館⇔外部(韓国政府)
12月以降: 監督所⇔学部(政府)⇔韓国統監府⇔外務省(日本政府)
cf. 勝浦校長との間のボタンの掛け違い
留學1年目の心理状態

参考・異文化接触の心理適応



名古屋大学留学生センターHP (<http://www.isa.provost.nagoya-u.ac.jp/interculture/adjust.html>) より、一部改編

1907年

- ハーグ密使事件: 留学生団体で抗議文
- 第三次日韓協約
「ああ、韓に人はいなくて、でたらめがここまでになった。韓に天はなく、でたらめはここまでになった。遂にこの条約を結ぶことになった、言おうと思うと心に傷が付く。考えようとしても懐いに傷が付く。むしろ言わない方がよい」



1910年(1)

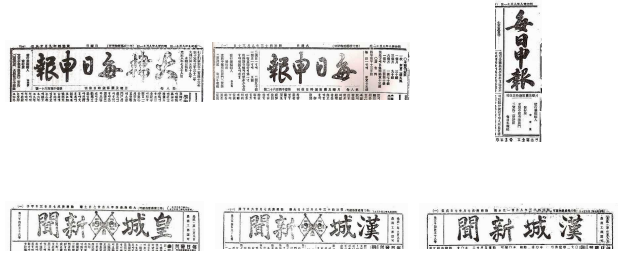
- 1月巻頭言
「これまでの7, 8年間の韓国の状況、つまり政治上の故国の歴史を回顧すれば、それはまことに惨憺たるもので陰鬱な多くの悲劇が演じだされた。そして「独立国」が「保護国」に変わり、その保護国も今日は合併問題に変わっていきこうとする状況になってしまった。だが、…自分のような故国を愁える者はいない。」

1910年(2)

- 併合直前: 合邦は遠くないのだろうが、韓国国内にいる者はそのことを知らないから動かない。韓国の外にいる者は知っていても動けない。どちらも動かないうちに国家は去って行く。堪え忍ばなければいけないことだろうか。
 - 併合の動きを押さえよとする運動。
 - 併合とともに公式に尾行が着く。
- 8月25日から9月14日。日記無し。

「隣の部屋の衣装箱の中に隠していた。…囚人のような苦境で心理的にも苦しかった。…どうなるかと思ってびくびくして、心と体がメチャクチャになりそうだった」

1910年(3)



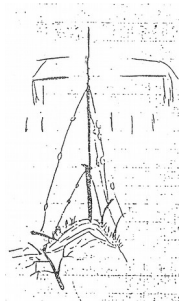
元公館に対する思い

- 留学生監督所(学部)
⇒併合: 総督府留学生監督所

- 1910年11月24日

「天を貫く高い老木がユサユサと倒れそうになった、空を仰ぎ見て、自分を褒めているようで、嘆かわしい。この老木は我が4千年の歴史を代表し、わが2千万同胞の荣誉を輝かしく掲げた。独立専権の公使館の大旗竿なのだ。…今年の秋になり(国を維持するという)待ち続けた望みも絶えたのだろう。」

- 12月1日、旗竿は倒れる。
- 1911年末 建て替え決定



1911年から帰国まで

- キリスト教に入信
- 韓国YMCAで活動。

思想的に深める傾向。

- 帰国後独自の宗教を作る。



卒業後

- 進路の分かる留学生が多い
多くが総督府機関へ(官費生)
(一部は亡命、独立運動など)
- 1919年以降(いわゆる文治政治)
中堅層として経済界に進出
1945年以降
指導層、重鎮。

まとめ

- 日本にいた韓国人が、併合までの動きをどう捉えていたか手に取るように分かる。
 - 当時東京にいた韓国人の様子も分かる。
- 日記を通じて、置かれた立場の違いを疑似体験できる。発想の違い、受け止め方の違いを知ることが大切なこと。